

花の歌 歳時記

前田康子

六月の池に立って、水辺の花をみると、いつも父のことを考える。仕事に忙しく、父とどこかに行った記憶は少ない。一度、近所の池でかきつばた、あやめ、しょうぶの違いを教えてもらった事があった。浮いている丸太をひっくり返して蛙の卵を見つたり、水に泳ぐ昆虫を見つけたりして、父も生き物が好きなんだと初めて思った。

父が釣りで捕らえた鮒を、水槽に飼ったことがあった。田んぼで私が取ってきた田螺もそこに掃除係として加わった。真夜中、父がぼんやりと水槽の中を覗いていることがあった。餌をやりながら、ぶつぶつ話していた。母が、植えた花をしゃがんでいつまでも見ていたり、父のそんな姿を見たりすると、親でありながら切ない感情におそわれた。

父との会話は非常に少なかったが、水槽の中で、私の田螺と、父の鮒が仲良くしていると、その時はそれだけでいいような気がしていた。



合歡

合歡の木のをしたを通ると、いつも虫の匂いを嗅ぐような錯覚に陥る。湿った風が吹き、合歡の花が咲く頃、ちようど虫が出てくるからであろう。合歡の花を取って幼い子に見せたら、これは花かというような顔をした。睫毛のようだという短歌があったが、本当に変わった形の花である。合歡の葉が夕方閉じる事を知らなかったころは、オジギソウの類かと思い、触れたら葉が閉じるような気がしていた。

芽ぶきでしをさな葉もまた夕さればほのかにとちて合歡はねむりす

佐竹弥生『なるはた』

ねむの木の枝折れやすくやさしくて寝足らぬ花を多くつけたり

山崎方代『こおろぎ』

合歡の木のうちたは、葉が夕方閉じる、眠りの習性を詠ったものが多い。佐竹弥生のうたは、細かく観察していて、幼い葉も同じように閉じているところをよく捉えている。また山崎方代のうたは、夕方開いて、朝方萎えてくる花の方を「寝足らぬ」といった。睫毛のような形と、ぼんやりとした花の色、特異な

習性とは面白い表現に出会った。

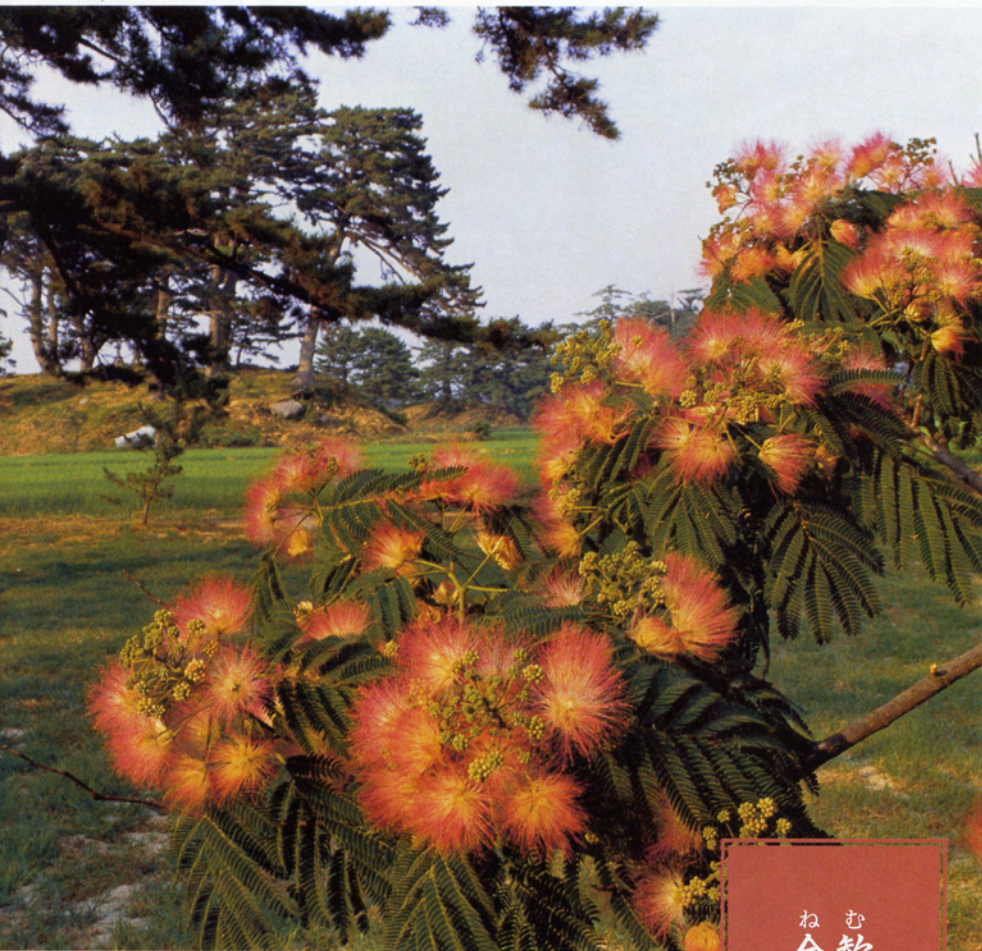
昼間みし合歡のあかき花のいろをあこがれの如くよる憶ひをり

宮 柊二『群鶏』

合歡と書いて「合歡」。コウカヤゴウカ

ンと読むと、この漢字を改めて意識する。この一首は、エロティックなイメージを漂わせている。あこがれのように思い出すのは、合歡の姿をした女性のようにもある。昼間の光や風を伴って、眩しく夜の闇に現れた。

ねむ合歡



つゆくさ
つゆ草



つゆ草

合歡の木が眠りの木ならば、露草は早起きな花である。早朝から咲き出して、昼前にはしぼんでしまっている。折り取ってコップにさそうと思っても弱い花で、帰りつくまでに萎えてしまう。

野の中に咲いている花で、赤い花よりも青い方の花に、はっとする事がある。なぜだろう。早春のおおいぬのふぐりや、秋のりんどう。

う。空の色が野に落ちていているように見えるからだろうか。

去年の夏思ひ出さむと目を閉ぢぬ露草の青が焦点となる

山吹明日香『風返し峠』

向日葵の花や、海の色、蝸の声、それのどれでもなかった。若い作者のうただが、去年の夏の出来事は、野に咲く露草の青の中に広がっていた。



露草の花の汁は刺繻の下絵を描くとき使われるという。水に流せばすぐ消えるからである。指先で潰しただけでも濃い青色に指が染まる。

「悪いけど」を必ずつけて頼む君月草の瑠璃とんぼに喰わす

梅内美華子『横断歩道』

つゆ草にはいろいろな異名がある。月草もそのひとつ。昆虫と植物を一首の中に詠むと、うたがとても立体的に見えてくる。六月、ヤゴから孵ったとんぼが水辺に美しい。そばにいるひとは少年の面影を残すような君か。

野の花をいうとき胸に露草の苦しきまでに咲きてあふるる

冬道麻子『遠きはばたき』

作者は長く病室での生活を送っている。自由で野を歩き回ることを想像するのでさえ、彼女の胸を締め付けるのかもしれない。子ども頃の見た露草の色。それは作者にとって切ない色となった。

矢車草

毎年、矢車草を植えていたから、毛のついたような変わった種の形も憶おぼえている。初めて、小学校の教室に自分の咲かせたこの花を持っていき飾ったときは、一日中嬉うれしかった。畑の隅に時々、ひよろりと矢車草が植えられていると、立ち止まって見てしまう。青や紫、白っぽい色の花もある。風に回っているように丸く不思議な形の花である。

矢車の青き星陥ち野のはてを重きかしら
を捧げて歩む

山中智恵子『玉蜻』

矢車草は、日本に同じ名で、山野に生えるまったく違う白い花がある。ヨーロッパから来た園芸種のこの花の方が知られているが、本当は矢車菊という名前らしい。異国の花だからか、やや幻想的に詠まれたうたが多い。「星の金貨」という童話があるが、上の句がそんなやさしい印象である。

にほやかに君がよき夜ぞふりそそぐ白き
露台の矢ぐるまの花

北原白秋『桐の花』

いま、ガーデニングが流行で、イギリスや南仏の庭を真似た植物の植え方が近所でも見

やぐるまそう 矢車草



られる。白秋は和風の花に加えて、洋花もよく歌に詠んでいる。ヒヤシンスやアマリリス、サフラン、ロベリヤ、サルビア、水色の小さい花をつける忘れな草など。

このうたの露台とはバルコニーのこと。人妻であった恋人と別れ、洋館に移り住んだ白秋は二十八歳。詩集『思ひ出』が脚光を浴び、文豪としての名声を高め始めた頃である。

ほろほると矢車草のイメージの崩れてゆ
けば街に飯くう

浜田 到『架橋』

浜田到は夭折ようせつの歌人であるが、この一首にはそんな作者の、儚はかなく繊細なイメージがある。取りたてて植物ばかりを詠んだ歌人ではないのに、残された少ない作品の中に、どうして矢車草のうたが入っていたのだろうか。矢車草は小さい花が集まって、一つの花に見えているのだが、それが幻想の中でほろほると崩れていってしまう、そして飯を食っている。ただそれだけなのに、悲しい一首である。

まえだ・やすこ 「塔」会員